

子どもが主人公分科会①

取組事業名	赤ちゃん訪問(乳児家庭全戸訪問事業)	対象	生後4か月までの乳児のいる家庭	担当	健康づくり課
事業内容	生後4か月までの乳児のいる全ての家庭を訪問し、子育て支援に関する情報提供や養育環境等の把握と健やかな成長・発達の支援を行います。また、支援の必要な家庭には、養育支援訪問や相談支援等継続的な支援につなげていきます。				
現状	赤ちゃん訪問の実施状況(平成25年度) ・家庭訪問数:1,107件 ・家庭訪問実施率:訪問対象家庭のうち86.8%	目標(31年度)	家庭訪問実施率 100% *各年度の訪問件数の見込み、実施体制等については、P. 120を参照。		

分科会での意見(付箋)	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・全戸訪問の実績(H26年度)から92%は全戸訪問できているが、残りの8%はどうなっているのか。 ・虐待につながったケースはないか。 ・全戸訪問が、虐待防止につながるのではないか。 ・乳幼児が確認できない場合はないのか。 ・赤ちゃん訪問が虐待防止につながっている。 	<p>【地域保健課より…】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃん訪問の実績 :H26年度 1115人 92.4% ・年度によって増減があるが、90%を超えての実績がある。 ・訪問に行けていない8%の理由とは、連絡が付きにくい、拒否されるなどである。断る理由は、忙しい、片づけていないなどであるが、裏に潜む気持ちは、市役所に来てほしくないと思っている。今後、分析が必要だと思っている。 ・今のところ、直接虐待防止につながったことはないが、虐待ケースにつながることもある。 <p>【子ども総合相談センターより…】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8%の支援、養育支援訪問を保健センター、子ども総合相談センターと連携して行っている。 ・各市町と要対協で連携している。何らかの形で状況をつかんでいく。

取組事業名	児童虐待防止のネットワーク	対象	要保護児童関係機関	担当	子ども総合相談センター
事業内容	「桑名市要保護児童及びDV対策地域協議会」において、児童虐待防止の総合的な取組を推進するため、様々な関係機関とのネットワークを構築し、支援体制の整備を進めていきます。				
現状	要保護児童及びDV対策地域協議会 ・代表者会議 年2～3回開催 ・実務者会議 年4～5回開催 ・運営委員会 年4～5回開催 ・進行管理会議 年4回開催	目標(31年度)	開催回数については現状の水準を維持しながら、関係機関の連携を深めるために実務者会議を充実させていきます。		

分科会での意見(付箋)	その他
<p>・親は、我が子を「いい子」と言いとてもかわいがってみえるが、仲間の中ではとても悪いことをしている。幼稚園、小学校、中学校の時に何か打つ手はなかったか。 他の保護者から状況を聞くと、どうしたらよいかわからない。</p> <p>・どこへ相談をしてよいか市民は知っているのか。それをどうアナウンスしていくか、広めていくかが課題である。</p> <p>・潜在的な課題がたくさんある。昔は村意識があった。今は隣のけんかに入っていく。現代の課題である。そこを市としてどう関わっていくかが求められる。</p> <p>・幼稚園、保育所に通っている子は健康診断などで、虐待の兆候を見つけることができる。未就園児に関してが問題である。</p> <p>・地域の民生委員、自治会長が集まって行政と話し合う機会はないのか。そういう機会では情報を得ることがある。</p> <p>・自分の地区の民生委員を知らないという人も多いのではないか。 ・民生委員と関わりたくない人も多い。個人のことを知られたくない。</p> <p>・10代で出産した人の子どもは虫歯が多く、30代で出産した人の子は虫歯が少ないという報告がある。</p>	<p>【教育委員会 指導課より…】</p> <p>・気づかれた方が、教育委員会へ連絡を入れていただき、指導課も入って学校、保護者へ指導をしている。学校だけで解決できない場合は、福祉も入ってケース会を行っている。小さい子は子ども総合相談センター、小中学生は教育委員会、青年は青少年サポートセンターと連携している。</p> <p>【地域保健課より…】</p> <p>・児童相談所の通報・通告はわかりやすい電話番号になった。(189)児童相談所と、子ども総合相談センター、地域保健課は連携をしている。窓口体制はある。</p> <p>【子ども総合相談センターより…】</p> <p>・民生委員との会議がある。</p>

取組事業名	小・中学校における確かな学力の育成	対象	公立小・中学校児童生徒及び教職員	担当	指導課
事業内容	学校教員が児童生徒と向き合い、その実態や思いを活かした授業づくり、学級づくりをすすめることにより、確かな学力の定着・向上に努めています。				
現状	少人数指導等ができる環境づくりを進めるとともに、教職員に必要な各種研修会等を実施しています。 【参考指標】 「算数・数学の授業が「わかる」と回答した児童生徒の割合」:76.3%(全国学力・学習状況調査における授業評価(平成25年度・桑名市))	目標(31年度)	個に応じたきめ細かな指導のための人的配置を行うとともに、教職員に必要な研修等を実施していきます。 【参考指標】 「算数・数学の授業が「わかる」と回答した児童生徒の割合」:現状値からの増加		

分科会での意見(付箋)	その他
<p>・三重県の学力調査結果は42位。かろうじて北勢地域で持っている状態である。</p> <p>・親の前ではいい子でいても、仲間の中では悪いことをしているという姿の子どもは、親が、良い点や正解だけを求めてきた結果ではないか。そのことが、親の知らないところでは何をやってもいいという姿になっている。桑名市は通塾率が高い。このことも影響しているのか。</p> <p>・以前、親父狩りをしたのはどんな子かということを取り上げていることがあった。幼稚園から塾ばかり通わせ、友達と遊ぶ機会を与えてもらえなかった子であった。あまり学力ばかりを重視していくと、親を刺激してしまわないかと思う。</p> <p>・学力の概念を考えなければいけない。保育園幼稚園の間は遊ぶだけ遊ばせたらよいと思う。</p> <p>・小さいうちに抑制すると、大人になり犯罪者になる。</p> <p>・教育者の質はどうか。いい先生が増えれば、いい子が育つ。点数だけ上がっても、その能力を悪いことに使ってはいけない。授業が楽しく、学校が楽しいというようになればいい。</p> <p>・指導課が、質を上げるのは難しいと言われるのはいいわけである。</p> <p>・桑名全体、県全体でまとまって取り組んでいって欲しい。</p> <p>・昔は1クラス40人だったが、今10人くらいの学校もある。生徒数の影響はあるのか。</p> <p>・活用力の大切さを教師はわかっているのか。</p> <p>・活用力を指導する時間は、どのように確保されているのか。</p> <p>・国語レベルの低さは、スマホの影響であるのか。</p> <p>・保育園児もスマホを使っている実態がある。</p>	<p>【教育委員会 指導課より…】</p> <p>・学力調査結果であるが、桑名市は全国とほぼ同じである(+2ポイント以内)。三重県では断然上位である。強いて言うなら、小学校の国語が全国平均より少し下である。</p> <p>今までは、1. 基礎基本、2. 活用力という考え方があったが、根拠を持って自分の考えも述べられるという活用力をつけることが桑名市、全国共に課題となっている。</p> <p>学力向上には、生活習慣(特に朝食の重要性)や学校のことを家の人に話すかということも重要な点であり、必要な事とされている。学校のことを家で話すということは、一日の振り返りを家の人に発表する機会が毎日あるということである。自尊心にも影響する。</p> <p>・TV、ゲーム、スマホに費やす時間が長いことが、桑名市の課題。読書などを推奨していく。</p> <p>・先生の質を上げることが難しい。研修会などを受けてもらっている。桑名市は、新規採用者の教員が多い。5、6年経つと地元へ異動していってしまう。</p> <p>・切磋琢磨するためにも、ある程度の人数はいる。</p> <p>・確かな学力のためにも、体験と学習が必要。ゆとり教育が推奨されていたが、現在はなくなっている。国も教員も模索しながら進めているところ。</p> <p>・国は少人数制の指針を示している。</p> <p>【子ども総合相談センター】</p> <p>・学力と虐待は関係している。安定した家庭と学力は関係している。</p> <p>【教育委員会 指導課より…】</p> <p>・今までは基礎基本を重視していたが、徐々にそのことも大事であるが活用力もともに大事であるという考え方になってきている。</p> <p>・授業の組み立ては、教師の力量にかかっている。</p> <p>・国語力とスマホの関係についてのデータはないが、桑名市の小学校6年生でスマホを所持しているのは50%である。また、読書時間が少ないのは確かである。</p>

取組事業名	中高生と乳幼児との交流事業	対象	中学生・高校生・子育て中の親子	担当	子ども家庭課・指導課
事業内容	「わくわく子育て体験(中学生対象)」「わくわくコミュニケーション(高校生対象)」において、乳幼児とのふれあいを通じ、生命の大切さ・親子のきずな・子育てすることの楽しさを実感できる体験を推進します。				
現状	わくわく子育て体験(中学生対象)の状況(平成25年度) ・年5回開催、のべ参加人数50人(公募の中学生)子育て中の親子のべ50組参加 わくわくコミュニケーション(高校生対象)の状況(平成25年度) ・年35回開催、のべ参加人数1,243人(桑名北高等学校の児童生徒が参加)	目標(31年度)	担当課と連携し、事業の周知を図りながら参加者の確保に努めていき、乳幼児とふれあう体験の機会を推進していきます。		

分科会での意見(付箋)	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・中高生が、赤ちゃんと触れ合うという子の事業は、心の栄養の宝庫となっている。 ・自分の思い通りにならない赤ちゃんを相手に、触れ合うというこの体験こそが、とても大切である。 ・虐待防止にもつながっている。 ・中学生の職場体験もあるが、是非、この交流事業を発展させていって欲しい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <p>グループ全体の意見</p> <p>議論が次にどう活かされていくかが大事。今までも議論はしてきたが、その次が見えてこないのが常である代表として出てきても、なかなか伝わらず形として見えてこない。 動いているのは、行政が考えたことだけになっている。</p> </div>	